

(2) 多面的・多角的な見方を育てる学習指導

家庭科の特性を踏まえた上で、多面的・多角的な見方を育てるためには、生徒に当事者意識をもたせた問題解決的な学習や協働学習を仕組むことが必要だと考えました。本研究では「多面的」「多角的」の定義を次のように行いました(図1)。

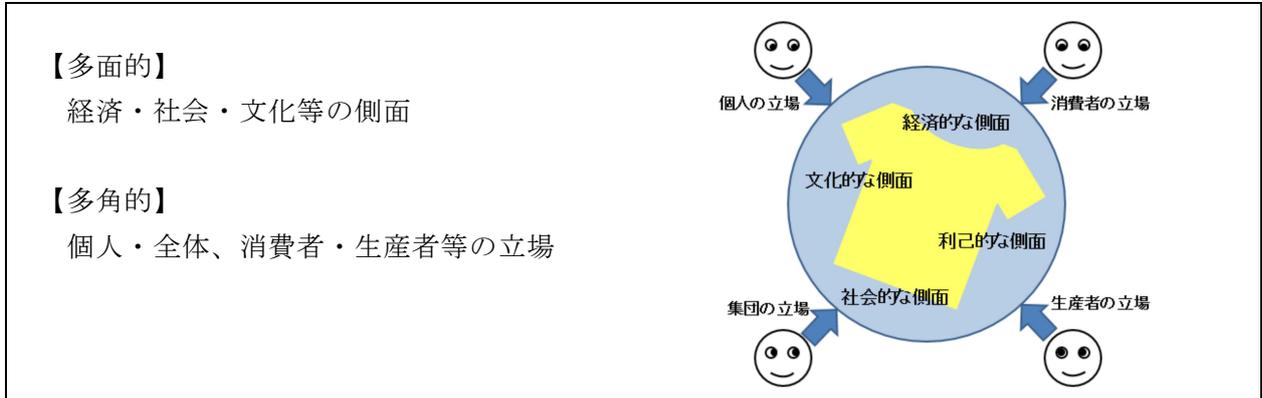


図1 「多面的」「多角的」の定義

ア 当事者意識をもたせた問題解決的な学習

家庭科においてはこれまでも、問題解決的な学習には取り組んできました。しかしそれは、生徒自身の問題解決的な学習にはなり得ていないことも多かったと感じます。伊波富久美はこのことを、「自らの現実の生活が置き去りにされたままで課題設定がなされており、表面的・形式的な問題解決的な学習に陥る可能性が多い」⁽¹⁾としています(図2)。つまり生徒にまず、当事者意識をもたせることが重要だと言えます。

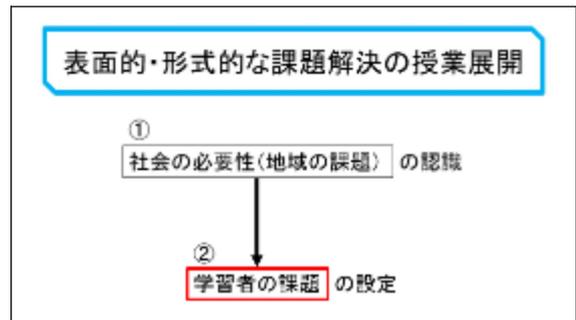


図2 学習者の課題設定1

さらに伊波は、『社会の必要性』を認識させるにあたっては、まず、『家庭生活での現実(実態)』に学習者の目を向けさせ、そのうえで、相互の『ずれや矛盾』を意識化させることが重要である。そして、それらが生じる『背景』について、じっくり吟味していく。そこには……“ホンネ”がある

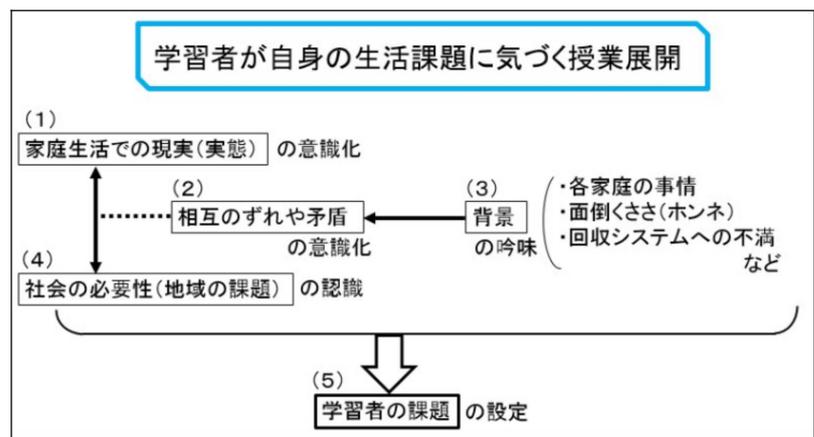


図3 学習者の課題設定2

かもしれない。……そのような背景にある具体的な障壁をどのように切り崩していけるのかを考えるのが、『学習者の課題』の設定であり、生活という文化的な実践に作り手として参加していくことになる⁽²⁾としています(図3)。この考えを基に、題材計画を立てました。

イ 多面的・多角的な見方を育てる協働学習

多面的・多角的な見方を育てるには、まず生活を多角的に捉えることが必要になってきます。伊波は、「生活を多角的にとらえられるようになるということは、社会的、文化的なさまざまな営みの中に、すなわち世界の中に自分の生活を位置付け、自分の生活を相対化することにもつながる。自分の生活がよりよくなることを追求するだけにとどまらず、自分以外の『他者の存在やその生活の営み』とのかかわりにおいて、自らの生活をどのように営んでいけばよいのか考えられるようになることを、家庭科教育での最終的な目標としたい。」⁽³⁾としており、これはE S Dの考えと重なります。そのためには、問題解決的な学習に協働学習を取り入れて互いの考えを交流させ、多様な考え方に触れることが重要になると考えました。

《引用文献》

- (1)(2) 伊波 富久美 『「わかったつもり」を問い直す家庭科での学び』 2014年 あいり出版 p. 6
(3) 伊波 富久美 『「わかったつもり」を問い直す家庭科での学び』 2014年 あいり出版 p. 10